

富山大学和漢医薬学総合研究所 民族薬物資料館 ニュースレター



第34回民族薬物資料館一般公開を開催いたしました

2019.11
第22号

本草学者の系譜 ー矢野文庫との繋がりー

2019年10月27日

本資料館内には、矢野文庫と称される本草書（植物を中心とする中国古来の薬物学を記した書）96部639冊が置かれています（所蔵は富山大学）。この文庫に繋がる本草学者に着目し、今回の一般公開は「本草学者の系譜ー矢野文庫との繋がりー」と題し、中部大学国際関係学部の財部香枝教授による特別講演「Her Story: 本草学と女性」を開催しました。科学史の中で知られている女性研究者はごく限られているのではないのでしょうか。今回の特別展で、本草学者の師弟・親子関係を示す系譜を作る際に、女性は皆無であること

に気付きました。財部先生のご講演は、我々の多くが認識していない本草学へ貢献した女性、中でも江馬細香に着目したものでした。



江馬細香（1787-1861）

細香は、大垣藩医江馬蘭斎（1747-1838）の長女として生まれました。父蘭斎は、元は漢方医でしたが、46歳の頃に蘭学を杉田玄白、前野良沢に学び、後に大垣で開いた蘭学の私塾は、蘭斎の死後も門人によって明治中期まで約90年間存続しました。門弟には水谷豊文や伊藤圭介など、尾張の本草学発展に尽力した人々がいますし、京都の山本亡羊との繋がりもありました（次頁本草学者の系譜参照）。細香は父から漢籍の素読を授けられたほか、本格的な詩画の教育を受けました。儒者・史家である頼山陽からは詩と書を、南画家である浦上春琴からは画法を学んでいます。彼女の作品の多くは飛脚でこれらの師に郵送され、添削指導されました。時には京都に滞在し、紹介された当時の文化人と交流、自らの芸術的感覚を磨いたようです。大垣では詩社を結成して定期的に詩会を開き、互いに作品を批評し合いました。参加する

のは、藩士、医師、寺住職など、多様な背景を持つ文化人で、細香はその中心人物の一人でした。

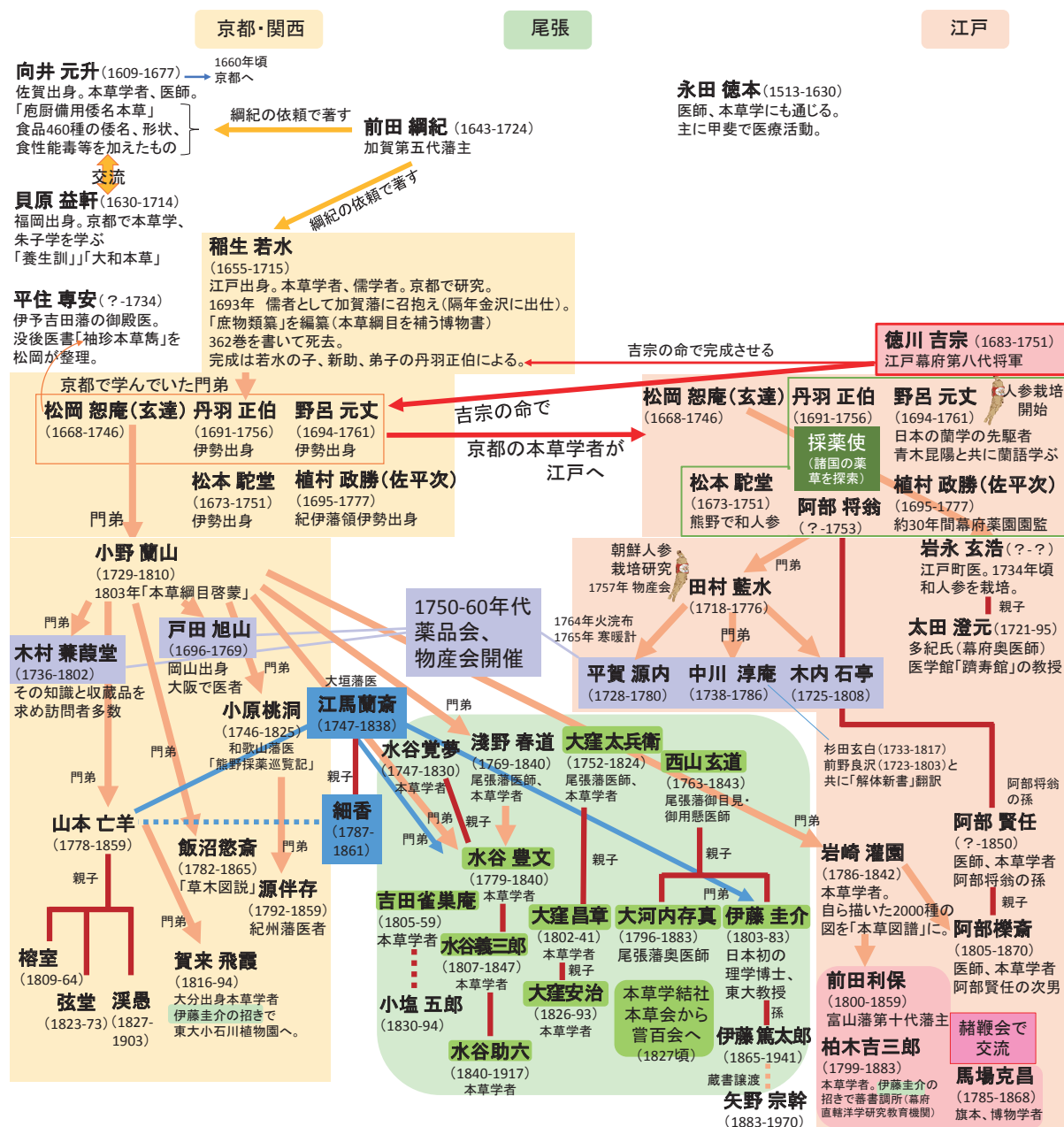
細香は家業にも深く関わります。父の門弟には細香が漢語を教えることもありました。詩歌だけでなく、医学に関する彼女の論述も残されています。父から聞き書きした前野良沢のこと（蘭化先生伝）、医学に関する七言絶句、山本亡羊の古希祝い、安政5年のコレラ流行、父蘭斎87歳での越前への往診付添いのことなどがありますが、中でも人間の結石に関する「癖石一塊」の初稿には、美濃で活躍した医師・詩人である神田柳溪（1796-1851）による修正があり、細香と医師神田との関わりが認められます。

細香のこうした活動は、江馬家の経済的余裕が支えとなったのは言うまでもありませんが、豊かな才能を開花させ、努力してきた細香の足跡は、もっと広く知られて欲しいと思いました。

本草学者の系譜

江馬細香やその父蘭斎は、どの本草学者と関わりがあったのでしょうか。ここにごく一部ですが、本草学者のその師弟・親子関係をまとめました。

日本の本草学者の系譜



ここに示したように、本草学が盛んだった地域は、歴史の長い京都、八代将軍吉宗以降の江戸、18世紀以降の尾張が代表的と言えるかもしれませんが、江戸時代は各藩で薬草栽培を試みていましたし、本草学者は各地にいたことと想像できます。江馬細香のように、文化人とし

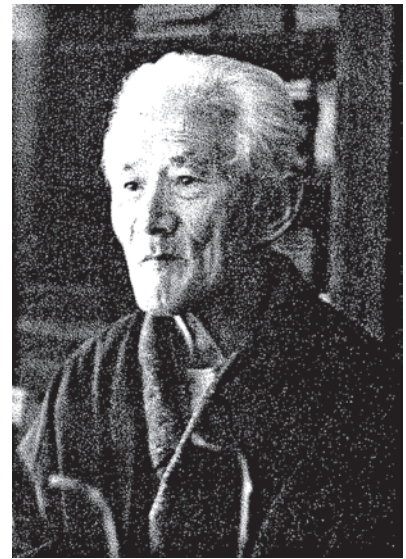
ての側面を持つ人もいたでしょうし、実際の繋がりはもっと複雑で、意外な人同士の繋がりがあったかも、と思いを馳せるのも面白いものです。

では次に、矢野文庫の寄贈者、矢野宗幹氏についてご紹介します。

やのむねもと

矢野宗幹氏略歴

明治 16 年 (1883) 3 月 15 日 福岡県企救郡城野村 (現北九州市小倉区上城野) で誕生した矢野氏は、中学時代から昆虫や植物に興味を持ち、東京帝国大学理科大学動物学科では昆虫学を専攻、卒業テーマとしてアリを選びます。卒業後は、山林局ならびに林業試験場に勤務、森林昆虫学および保護学を担当し、シロアリ、アリ、ハチなどの分類や生態の緻密な研究を行ないました。大正 6 年に東京昆虫学会を創立の際は中心メンバーの一人となり、学会誌である雑誌「昆蟲」には 1926 年の創刊直後に多く寄稿しています。その後、東京帝国大学農学部 (大正 10 年 - 昭和 11 年)、京都帝国大学農学部 (昭和 7-18 頃)、東京農業大学農学部 (昭和 7-21) で講師をしつつ、東京昆虫学会会長 (昭和 6、13、14)、日本応用昆虫学会会長 (昭和 16) を歴任します。昭和 23 年に東京下目黒より郷里北九州に転居し、昭和 45 年 (1970) 12 月 31 日、心臓衰弱のため享年 87 歳で逝去されました。



昆蟲 39 巻 2 号 (1971) より転載
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10651226/>

矢野文庫はなぜ富山大学に？

昭和 51 年 7 月、新註校定国譯本草綱目 10 に発表された、上野益三「二人の本草学者 (白井光太郎と矢野宗幹)」によると、白井光太郎 (1863-1932) 氏没後、矢野氏が白井氏本草学の後継者として認められていたそうです。白井氏は、明治から昭和にかけて活躍した本草学史研究の道を拓いた菌学・植物病理学者で、明治 40 年から大正 14 年 (1907-25) にかけて東京帝国大学農科大学教授を務めています。白井氏の死後、矢野氏はその論著の改訂、編集を行なっています (『日本博物学年表』『本草学論攷』四巻など)。また、白井氏の本草書を上野図書館 (現国立国会図書館) 収蔵に奔走しました。現在その本草書は白井文庫として知られています。

矢野氏の本草学における著名な業績の 1 つに、頭註国譯本草綱目の校訂があります。本書に関わっていた、本学和漢薬研究施設長だった木村康一氏によると、富山県史編纂室の大田栄

太郎氏を通じ、和漢薬研究施設へ矢野氏の蔵書 96 部 639 冊は譲渡されたそうです。「本草綱目啓蒙」の享和 3 年 (1803) 版ならびに重修版の完本、光緒 30 年版の「經史証類大観本草」、いわゆる武昌柯氏本の完本など、極めて珍しいものも含まれます。

白井氏の若い頃は、江戸時代以来の本草図書は市中に多く残存し廉価でしたが、矢野氏の頃になると最早そのような状況ではなくなっていました。矢野氏自身、徒に古本漁りに浮身をやつしていると思われるのは心外だと言っていたそうですが、上野氏にはそう見えたようです。東京帝国大学農学部講師を嘱託され、応用昆虫学の講義を担当 (大正 10 年 4 月から昭和 11 年 3 月まで) されていた頃、東大で受け取った給与のほとんどを本草書購入に充てていたとの談がありますが、これは恐らく生涯を通してのことでしょう。

矢野氏の本草学に関する考え

矢野氏は、江戸時代の日本の本草学を、薬物学が多分に含まれているが、博物学と捉えていました。それは、中国の本草学と違い、動植物の全ての方面に関わる学問であるからです。

中国古代の本草学、江戸時代の日本の本草学、現代の動植物学は互いに別物であり、これらの流れの推移を明確にし、どれが本来の本草学で、どこからが博物学かを見極める必要があります、その推進のために、本草書の書誌学的研究が必要で、それには十分な校定を経た本ができて、はじめて根本資料として使うことができる、と述べていました。それと共に、本草書の学術的価値を見出すのが我々の目的でなければならぬ、と説いています。

上野氏が矢野氏と本草学について最初に語り合ったのは昭和16年(1941)で、場所は矢野氏が勤める林業試験場近くの自宅の、古書が

堆く積み上げられた八畳ほどの書斎でした。気難しそうで一見取り付きにくい、ボソボソとしてはいても物静かな話しぶりは人を引きつけないではなかったそうです。

矢野氏の他の蔵書は？

氏の東京農業大学講師時代の教え子、長谷川仁氏に譲渡された蔵書は、現在国立国会図書館古典籍資料室に保管されており、矢野・長谷川旧蔵資料リスト、とネット検索すると、その蔵書の詳細を知ることができます。その多くに伊藤圭介(1803-83)の孫、篤太郎(1865-1941)の名前があり、篤太郎と矢野氏の深い繋がりが察せられます(系譜参照)。矢野氏の寄稿は、ci.nii.ac.jpで「矢野宗幹」で検索すると56件ヒットし、半数ほどは国立国会図書館デジタルコレクションから全文を読むことが可能です。

(文責：民族薬物資料館長 毛利 千香)

アクセス

バス

富山きときと空港から富山駅まで約20分、富山駅からバスで約30分。

タクシー

富山駅から約20分。富山きときと空港から約20分。

自家用車

北陸自動車道「富山西IC」から約4分、「小杉IC」から約20分。



富山大学 和漢医薬学総合研究所 民族薬物資料館

Address 〒930-0194 富山県富山市杉谷 2630
E-mail museum@inm.u-toyama.ac.jp
TEL/FAX 076-434-7150
URL <http://www.inm.u-toyama.ac.jp/mmmw/index-j.html>